

2021 年全豪オープン短評 (4)

大坂-ウィリアムズ戦

因縁のセリーナ・ウィリアムズ戦

ウィリアムズが今年の全豪にける意気込みは並大抵のものではなかった。グランドスラム大会の勝利数 23 勝は女子テニスの歴代 2 位である。あと 1 勝すれば、マーガレット・コート・スミスの記録に並ぶ。そうすれば、以後何十年も破られることのない大記録となる。しかし、2017 年の全豪優勝以後、2018 年と 2019 年に 2 度ずつグランドスラム大会決勝に進んだが、いずれも負けている。この 1 勝が遠い。出産を経ただけでなく、自然年齢も重ねていく。40 歳直前のセリーナ・ウィリアムズに残された時間はそれほどない。もしかしたら、これが最後のチャンスなるかもしれない。悲壮な決意をもって、今年の大会に準備を重ねたはずだ。

2018 年の全米オープンで 24 勝目が実現するはずだった。いまだ経験の浅い大坂なおみ相手なら、記録達成は難しくないと思っていただろう。ところが、である。180km/h を超える速いサーブを次々に決め、ストローク戦でも一歩も引けを取らない大坂にたいして、ウィリアムズは苛立った。「こんなはずではない」という思いが、ラケット破壊の怒りに爆発し、コート外からのコーチング、さらに再度のラケット破壊で、第 2 セットの 1 ゲームを戦わずして失うという前代未聞の試合になった。そして、弾丸サーブが次々と決まる初陣の大坂がこの大舞台でウィリアムズを押し切り、グランドスラム大会初優勝を記録した。しかし、試合に勝っても大坂は喜びの表情を現わせなかった。サンバイザーを下げて顔を隠し、ベンチで涙した。まるで敗者のように振舞わざるを得なかった。さらに、この時の表彰式は悲しいものだった。ニューヨークの観客は大坂にブーイングを浴びせ、大坂は表彰式でも涙することになった。さすがにウィリアムズは大坂を抱き寄せて慰めたが。

それから 2 年余を経過して、再びグランドスラム大会で両者の対決が実現した。大坂はウィリアムズに憧れてテニスの道に入った。ウィリアムズをリスペクトする大坂にたいし、ウィリアムズはもう何のわだかまりもないという。しかし、勝負は勝負である。2018 年当時と比べ、ウィリアムズはかなり体を絞り込んできた。2018 年の戦いではウィリアムズの息が完全に上がっていた。正確には分からないが、当時から 10kg~15kg の減量で今年の全豪オープンに臨んできた。体のキレの良さやパワーは全盛時を彷彿とさせるものだった。これだけ準備を重ねてきたウィリアムズにたいして、大坂がどのように戦うのが、それが最大の興味だった。

第 1 セット

コイントスでサーブを選択した大坂だが、緊張の所為か、いきなりサーブをブレイクされてしまった。波乱を予想させる出だしだった。ウィリアムズは次のサーブゲームをキープし、ウィリアムズは 2-0 とリードする滑り出しになった。大坂のファーストサー

ヴィスが決まらず、第3ゲーム目も苦しい展開になった。このゲームでもダブルフォールトで、相手にアドヴァンテージを与えてしまった。もしここでブレイクされていれば、第1セットはウィリアムズの一方的な展開になったはずである。しかし、一皮むけてメンタルが強くなった大坂は大崩れしない。大坂はここで踏ん張り、3ポイント連取して、かろうじてゲームカウント1-2とした。そして、ここから大坂はさらに連続して4ゲームを連取して、一挙に5-2とウィリアムズを引き離れた。

この後、ウィリアムズがサーヴィスをキープして5-3となり、大坂がセット締めるサーヴィスを迎えた。ここでもダブルフォールトが1本あったが、簡単にゲームを取り切り、第1セットを取得した。このセットの大坂のファーストサーヴィス確率はなんと36%である。第1サーヴィスが入った時のポイント取得率は75%だが、これほど低調なファーストサーヴィス確率でセットを取り切ったことが不思議だ。「負けに不思議な負けなし」という野村語録通り、ウィリアムズのそれも48%と高くなかった。どっこいどっこいだったのである。サーヴィスが不調な大坂を攻撃できず、逆にアンフォーストエラー（大坂11本、ウィリアムズ16本）を重ねたために、ウィリアムズは序盤の優勢を維持することができなかった。

大坂以上にウィリアムズが緊張していた。ウィリアムズは大坂のストロークのスピードを警戒しすぎ、ストローク戦でのプレッシャーを感じていたと思われる。それが余分な力みをなり、アンフォーストエラーを重ねる原因になった。

4回戦で戦ったムグルーザは一見してストローク戦を制しているように見えたが、試合後の記者会見で「大坂のストロークのプレッシャー」が大きかったと話している。大坂のストロークはスピードとパワーがあり、多くの女子選手には男子選手と戦っているような感覚を与える。そのプレッシャーがミスを誘発させる。

ウィリアムズが第1セットを取り切るチャンスがあったにもかかわらず、ずるずると押されてしまいセットを失ったのである。

第2セット

第1セットとは逆に、第2セット第1ゲームで、大坂が早々とウィリアムズのサーヴィスゲームをブレイクした。このリードを保ったまま大坂4-3で迎えたサーヴィスゲームで、ウィリアムズが大坂のサーヴィスをブレイクした。ブレイクしたというより、大坂はなんとダブルフォールト3本で、戦わずして相手にゲームを与えてしまったのである。4-4となり、試合は一挙に風雲急を告げるようになった。

大坂のファーストサーヴィスの確率は56%と上がったが、ダブルフォールト5本を重ねた第2セットは、サーヴィスゲームをうまく組み立てることができず、接戦になってしまった。ウィリアムズも同様に、ファーストサーヴィスが入らず、大坂よりも低い44%の確率だった。

双方にミスの多いこの試合を決したのは、最後の2ゲーム6分間である。

大坂のサーヴィスがブレイクされて4-4となった次のウィリアムズのサーヴィスゲーム。

ウィリアムズのダブルフォールト 1 本と、大坂のバックハンドクロス 3 本のエースのラブゲームで再度、ブレイクバックした。このブレイクに要した時間は 3 分だった。

そして、最後になった大坂のサーヴィスゲーム。最初のサーヴィスエースに始まり、フォアハンド 2 本とバックハンド 1 本の強烈なストロークでウィリアムズを粉砕してしまった。このゲームに要した時間も 3 分だった。

最後の 6 分間 8 連続ポイントの猛攻で、大坂は憧れのウィリアムズに引導を与えたのである。本当にこの敗戦がウィリアムズにとって、最後のグランドスラム大会決勝になるかもしれない。

この試合は大坂もウィリアムズも得意の弾丸サーヴィスで相手を制することができなかった。ウィリアムズのストロークは強烈だが、ウィリアムズは腕の力だけでボールを叩く。大坂のストロークは腕の力ではなく、下半身の安定した動作に裏付けられているからキレがある。この違いは大きい。ウィリアムズがさらに 10-15kg 減量してトレーニングを積むことができれば、まだ大坂と戦うことができるが、40 歳を迎えるウィリアムズにそれを求めるのは酷だろう。

歴代 1 位のグランドスラム勝利記録が遠ざかる。記者会見で見せたウィリアムズの涙は、もう勝利を得ることができないかもしれないという悲しみの涙である。